

D-7政治家列伝

439. スカルノの生い立ち

インドネシアの初代大統領のスカルノ(Sukarno1901-70)は 1901 年スラバヤで生まれた。ジャワ人でプリアイ(→629)の家系である父がバリ島シンガラジャで教師している際に結婚したバリ貴族の家系の女性との間の子供である。

父がスラバヤで教職の間にスカルノは父方の祖母に育てられた。インドネシアではこのような子供の育て方は珍しくない。祖母の居たのは東ジャワのブリタル(→147)である。そこでサリナ¹という乳母からの感化を受けワヤンなどジャワ文化に親しんだ。

原住民学校からスラバヤ高等学校に入学するために故郷を離れ、スラバヤ時代はイスラム同盟(→287)の指導者のチョクロアミノに私淑し大きな影響を受けた。

さらにバンドゥン工科大学(→108)に進む。同大学は開設されたばかりで当時の原住民が受けうる最高の教育であり、スカルノは第一回卒業の建築学士である。本人によれば建築は工学ではなく創造の芸術である。芸術的素質を自負しており、後年の女性遍歴も女性美探求の止むに止まらない芸術的衝動であると開き直っている。ちなみに彼の芸術的素質は息子のグル(→456)に受け継がれている。

バンドゥンではチプト・マンゲクスモ(→289)、デッケル(→687)の影響を受け、民族主義者として頭角を現わし、民族主義運動にのめり込む。卒業後、1927 年民族主義の結集を計りインドネシア国民党(→293)を組織して自ら党首となったのが 26 歳である。

スカルノは美男子であった、熱気あふれる巧みな演説で民族独立を国民に訴え、自らを“夜明けの子”として民族主義を鼓舞した。組織者、先導者としてスカルノの人气が上がるとともに、オランダ植民地政庁から警戒された。

演説を行うたびに官憲から中止させられたが、1929 年、秩序破壊と擾乱煽動のかどで逮捕され2年間の投獄生活を過ごす。この間の 1930 年バンドゥンの法廷で弁明の機会が与えられ、この法廷陳述は『インドネシアは告発する』という冊子²にまとめられた。

1931 年、歓呼の声に迎えられて釈放されたが、植民地支配批判の舌鋒^{せつぽう}はますます鋭くなり、1932 年 8 月再度逮捕された。当局はこの危険人物をエンデ(→218)に流刑にし、その後、流刑先はブンクル(→099)に変更された。1941 年太平洋戦争が始まりオランダがうろたえる中で日本軍によって解放されるまで9年間の流刑生活であった。

何れにしろスカルノは他の民族主義者と異なり西欧留学の経験はないが、洋式教育を受けた数少ないエリートである。流刑先でも古今東西の哲学、政治、経済、宗教の書を読破し思索を重ねた。インドネシア語、ジャワ語、オランダ語のみならず英語、独語、仏語にも通じていた。

⇒293.インドネシア国民党、304.プートラとジャワ奉公会

¹ ジャカルタの国営百貨店サリナの命名はスカルノ大統領の乳母への感謝の意である。

² スカルノ大統領はインドネシアの人民を表す呼称としてマルハエン(Marhaen)を紹介した。マルハエンの名はインドネシア的社會主義と民主主義の名称としてマルハエニズムとしてインドネシア国民党(PNI)のスローガンとなった。辞書では「庶民」と普通名詞になっているが、語源はスカルノは自叙伝でマルハエンは若い頃に実際に会った農民の名であると語っている。スハルト体制崩壊後の選挙においてマルハエンを名乗る政党が復活した。

440. 独裁者・スカルノ大統領

日本の敗戦に合わせてインドネシア独立宣言を発し、初代大統領に選出されたが、対日協力の戦争犯罪人というオランダ側の極印に身を潜めざるをえず、大統領は象徴的君主のような存在に甘んじこの間の政治の主演はシャフリル首相(→376)であった。

シャフリル、ハッタのオランダ協調路線に対してタン・マラカ(→295)など大衆蜂起による闘争路線が対立した時もスカルノ大統領はシャフリルを支持した。

スカルノ大統領が変身するターニング・ポイントは 1949 年のハーグ協定(→330)によってインドネシアの独立が国際的に認められた以降である。対日協力者という呪縛は解かれ、世にはばかるものはなくなった。その後のスカルノ大統領は独立戦争間の隠忍自重の反動のようであった。

バンドゥン会議(→458)を成功させ世界のリーダーと目されるようになった。対外的にはイリアン解放(→432)を怒号し、応じないオランダを帝国主義者、植民地主義者と悪罵を極めて罵り、オランダ資産を没収した。

“1945 年憲法”への復帰により大統領権限を強化した。意に従わぬ議会を解散し批判的な政党を禁止し政敵を逮捕した。大統領に批判的な新聞を廃刊にし、モフタル・ルビス(→965)などのジャーナリストを逮捕し言論を統制した。

シャフリルも政敵として退けられた。大統領の頭越しにオランダと交渉をすすめ国際的に大統領より有名になったシャフリルへの反発は政治路線の対立もさることながら嫉妬もあるように思う。共にインドネシア独立運動の同士であったハッタ副大統領は辞めた。

スカルノ政権末期では大臣を大量生産して大統領も全員の名前を知らないくらいであった。その中でスバンドリオ外相³、レイメナ副首相、アイディット共産党書記長(→446)、ヤニ陸軍参謀本部長などお気に入りにはスカルノ大統領官邸に詰め、クラトン(→121)政治といわれジャワ王国時代に戻った感があった。

歌のうまいことがスカルノ王宮常連メンバーの資格であった。メガワティの幼児の回想録にレイメナ副首相がスカルノ家の執事か家庭教師のように描かれている。独裁化の行き着くところとして 1963 年 5 月“終身”大統領になった。

平日の夜は第三夫人のデヴィ夫人(→363)、週末はボゴールの第二夫人ハルティニ夫人(→442)、合間を縫ってはその他愛人宅と多忙であった。

国民が餓えているという厳しい現実への対策は「インドネシア・バニャック・マカナン(インドネシアにはいっぱい食べ物がある)」という歌を作詞しメロディをつけて連日ラジオで放送した。しかし革命のロマンでは国民の空腹は満たされなかった。

スカルノ大統領は思想的には民族主義者であったが、政策は著しく革命的であった。しかし体質的には極めて保守的であり、やり方は権威主義的で国王のようであった。好色、好戦、浪費、容共の4つがスカルノの特徴であり欠点であった。

⇒379.指導される民主主義

³ スバンドリオ(Subandrio 1914-2004)はスカルノ大統領の側近としてスカルノ末期の外交で活躍した。東ジャワ出身の医師から転向した外交官である。独立戦争、駐英大使、駐モスクワ大使の外交官キャリアにおいて見るべき成果はないが、外務大臣になった。スカルノ側近として親共産党(北京政府)外交を展開した。第一副首相として外務大臣以上の存在であり、大統領の非常時の後任者と擬せられたが、スバンドリオ自身には何の政治的基盤もなかった。本人よりは夫人が野心家であつたらしい。9月30日事件当日はスマトラ島に遊説中であつたが、事件以後は反共派はスカルノ大統領への直接の批判が躊躇されるため、共産党シンパとしてスバンドリオ外相を標的にしたデモがエスカレートした。スカルノ大統領はスバンドリオ外相を擁護し続けたが、3月には力つきた。裁判では祖国への反逆として死刑を宣告されたが、終身刑になり2004年に天寿を全うした。

441. スカルノの晩年

9月30日事件(→384)の発生を知ったスカルノ大統領は何事かを予期して共産党の根城のハリム空港に身を寄せたが、クーデター鎮圧の情報などが錯綜する中でボゴール宮殿(→113)へ移動した。大統領の当日のこの行動は不可解であり謎⁴である。デヴィ夫人(→363)が悔やんでいるように、もしこの時に大統領官邸に戻りクーデターを收拾したならばインドネシアの政局は変わったかもしれない。

数日後の虐殺された将軍への同情から国民の弔意を集めて行われた葬儀にも出席しなかった。クーデターを起こした共産党とグルであると疑われることにより大統領は追い詰められた。以降もスカルノは大統領として政局の收拾を図ろうとしたが、共産党を擁護の姿勢を崩さなかったため、反共産党の盛り上がりの中で、不動と思われた大統領のカリスマ性も地に落ちた。

翌年の3月11日、大統領官邸をデモ隊に包囲され、逃げた先のボゴール宮殿へ押しつけてきた軍の幹部に力つきてスプルスマル文書に調印⁵した。以降、スハルト将軍に実権を委譲させられてからは政治から閉め出された。新聞記者を集めては「スハルト将軍に任せている」などと虚勢からの大言壮語も無視された。

大統領に1966年の独立記念日の演説(→974)の機会が与えられた。スカルノは自己の政策を正当化し共産党をかばったため国民のブーイングは高まった。公然と大統領非難が行われる中で終身大統領の称号返上を強要され、翌年2月には大統領を解任された。スハルト将軍が大統領代行に任命された。

元大統領の余生はボゴール宮殿で幽閉状態⁶にあったが、病気治療を理由にジャカルタのヤツツ宮殿に出かけることが許された。ヤツツ宮殿はデヴィ夫人の館であったが、彼女はインドネシアへ戻ることを許されなかった、と言っている。

スカルノ大統領は殺害されず、また裁判にかけられず1970年に失意のうちにボゴール宮殿で死亡した。



スカルノ大統領 葬儀

数多くの妻や家族の見取りもなく、孤独の中の飼いや殺しであった。「ナイフによって死ぬ」というドゥクン(→866)の予言は当たらなかった。スカルノ大統領の死因に難しい病名はあるが真の病因は江戸川柳でいう“腎虚”^{じんきょ}であろう。葬儀は元大統領の葬儀らしく盛大に行われたが、生前の名声の割には冷ややかであった。

1998年のスハルト体制の崩壊後、それまでのタブーが解禁になった。スカルノ大統領毒殺説もその一つである。治療の薬に遅効性の毒薬が混

入していたという噂が語られている。スカルノ大統領自身の病気が9月30日事件の遠因であったことを考えればスカルノの死期を早める必要はなかったと思われるが・・

墓地について本人はプリアンガン(→106)の地を遺言したが、無視されてブリタル(→147)に葬られた。現役

⁴ アイディット共産党書記長は中部ジャワで再起を図るためにスカルノ大統領を連れて飛行機で中部ジャワへ移動することをすすめたが、スカルノ大統領はアイディットを振り切ってジャカルタに残った。

⁵ スプルスマルはいわば 密室クーデターの疑惑がある。当局はスプルスマルはスカルノ大統領が自発的に書いたと言いつけてきた。スハルト失脚後、この談判はスカルノ大統領にピストルがつけつけられていたという証言が出てきている。(朝日1999/8/28)。

⁶ 新体制は独立の父を裁判にかけるわけにもいかず、その処遇に困った。日本かエジプトに亡命させることも検討されたらしい。

時代の数えきれない称号のうち、当初の墓碑銘には“工学技師”だけが記された。2001年スカルノ大統領の長女メガワティがインドネシア第5代大統領に就任した。スカルノ大統領解任後、34年目になる。⇒387。3月11日大統領令

442. スカルノ大統領夫人

スカルノは自らは女性賛美者であると自画自賛しているが、要はいわゆる“女たらし”である。大統領になって以降の女性遍歴は政治がからむだけに問題があった。



Siti Oetari
Tjokroaminoto

最初の結婚相手は民族主義運動の師であるチョコロアミノト(→287)の娘である。スカルノがバンドゥン工科大学入学に伴いバンドゥンで同居したが、形式だけの結婚で兄妹の関係を越えなかったらしい。彼女は後の第4代ワヒド大統領(→455)の伯母の関係になる。ワヒドがメガワティと従兄妹だと言ったのは政治的発言であるが親族関係はないこともない。

大学生のスカルノが引きつけられたのはバンドゥンの下宿先のインギット(Inggit)という12歳年上の主婦であった。彼女は離婚してスカルノと結婚した。スカルノの理解者であり、投獄されている間のスカルノの心の支えであった。エンデ(→218)、ブンクル(→099)の流刑先にも同行した。文字どおりの糟糠の妻であったが、子供がなかった。

スカルノは流刑先のブンクルでは教師をしていた際に女生徒の一人と親密になった。後にスカルノと結婚したファトマワティ夫人(Fatmawati 1923-80)である。姉さん女房のインギットはスマトラ女性に座を譲り離婚した。

スカルノの女性関係は大統領の座が安定する頃になってから奔放になった。中部ジャワのソロで会社経営者夫人のハルティニ(Hartini)を見染めて



ハルティニ

1953年に結婚した。イスラム教徒であるので重婚に支障はない。ハルティニ夫人は5人の子供あるとは見えない美人である。気の強いスマトラ女性と比べると柔和なジャワ女性に引かれたのであろう。

ファトマワティ夫人は怒って家出したが離婚には応じなかった。彼女はインドネシア誕生時の若き大統領と苦難を共にし、“国母(Ibu Negara)”として民衆の敬愛の念も深かった。ちなみにスカルノとの間には5人の子供(→456)があった。後のメガワティ大統領がその一人である。



ファトマワティ

国軍の幹部の夫人連が大統領官邸をデモ行進し大統領の第二夫人に反対した。コーランではイスラム教徒は4人の妻が認められているとはいえ、国軍幹部の夫人は西欧思想の影響を受けていた。

ファトマワティ夫人がスマトラ島出身であることはインドネシア統一の象徴でもあった。大統領夫人がスマトラ人からジャワ人になることはスマトラとの政治問題が地域対立として微妙であるだけに大統領としてもファトマワティ夫人に気を使わざるをえない。ファトマワティ夫人は官邸を出て行ったが、第二夫人ハルティニはジ

ジャカルタの大統領官邸ではなく郊外のボゴールに居住させることで世論をなだめた。大統領の寵愛はあるものの正規の夫人としての処遇を受けていないハルティニ夫人に取り入れたのが共産党である。

外交のつきあいでは夫人がいないと拙いので長女のメガワティが代役を務めた。後に政治家になろうとした動機には華やかな過去の思い出もあろう。

そこに新たに第三夫人が現われた。日本人のデウィ夫人(→363)である。その他は紙面不足につき省略する。



443. ハッタ副大統領



インドネシアの首都ジャカルタに 1985 年に新設された空港は『スカルノ/ハッタ国際空港(→851)』と名づけられた。スカルノとハッタはインドネシア独立の指導者で共和国初代の大統領と副大統領である。

“独立の父”として空港名のように両者はペアで言われるが、一心同体であったわけではなく時としては論争と対立の関係であった。何れにしろ両者の名前はインドネシアがある限り建国神話として語り伝えられるであろう。

ハッタ(Hatta1902-80)はスマトラ島のブキティンギ(→098)の生まれのミナンカバウ人(→609)である。一族が裕福な商人であったため私費で 1920 年オランダの

ロッテルダム商科大学に留学した。この間にインドネシア協会の指導者として留学生の中で頭角を現した。

1932年、帰国後はシャフリル(→444)とともにスカルノを盟主とするインドネシア国民党(→293)に参加し活動を行ったが、スカルノが捕らえて以降は後継者と対立しインドネシア国民教育協会を結成しスカルノと競合関係になった。

しかし、1934年にシャフリルとともにオランダ植民地政庁に逮捕され、タナメラ(→242)に流刑され、後にバングアの孤島バンダ島(→232)に移された。

流刑先にも大量の本をもって移動し、勉学を怠らなかった。一族が事業を行っていたことから経済学に造詣深かった。独立後のインドネシア経済において彼の唱える経済とは組合主義でありユートピア的であり、経済政策が評価されるほどの実績はない。

太平洋戦争が始まりハッタはシャフリルとともに西ジャワのスカブミに移された。進攻した日本軍によって救出され、その後はスカルノとともに日本の軍政に協力した。しかし日本の軍政当局から見ると^{れいり}と憐れなハッタの存在は煙たく暗殺計画もあったといわれる。

日本の敗戦後、1945年8月17日、スカルノと並び独立宣言(→317)に署名し共和国初代の副大統領に就任した。

スカルノの〈ジャワ的権威主義〉に対してハッタはそれなりに〈西欧的合理主義〉者であった。しかしハッタは西欧派に属しながらジャワ流の土着思想の理解者であることに努め、シャフリルのようなピュアな西欧派と比べると土着派寄りであった。このような状況で《土着派》のスカルノと《西欧派》のシャフリルの間の対立に、ハッタは両者の調停者の役割を果たすことが多かった。共和国首相としてオランダとのハーグ円卓会議(→330)に臨みインドネシアの完全独立に導いた。

その後、シャフリルは失脚し、ハッタ副大統領もスカルノの容共、反議会主義の方針を巡って対立し、政権の汚職体質を批判し、ついに1956年に副大統領を辞任した。

ハッタというよきパートナーを欠いたスカルノ大統領のその後は独善と独裁化を加速させ、その行き着く所が9月30日事件(→384)であった。

⇒291.オランダ留学生

444. シャフリル首相



スタン・シャフリル(Sutan Sjahrir 1906-66)スマトラ島出身のミンカバウ人(→609)である。スタンはミンカバウ人の貴族の家系の称号である。ハッタとともにオランダ留学中からインドネシア独立を求める政治活動に入った。

帰国以来、インドネシア国民教育協会を指導していたが、第二次世界大戦となり植民地政府に逮捕されて流刑されていた。

日本軍の蘭印の占領により民族運動の指導者は釈放された。スカルノやハッタはインドネシア独立の手段として日本の軍政に協力したが、シャフリルは日本軍は真の解放者でないとの確信の

下に一切の協力を拒否した。

日本の敗戦後、1945年8月17日、インドネシアは独立宣言(→318)を発したが、スカルノ/ハッタはオランダから対日協力者として断罪されていた。この時、日本との関係でクリーンであるシャプリルの出番となった。当時刊行されたシャプリル著『我々の闘争』は対日協力者を厳しく批判している。

実権を掌握したシャプリルはスカルノ大統領を象徴的存在に祭り上げ、自ら実質の最高権力者である首相・外相の要職に就き、オランダとの外交交渉の当事者となった。

しかし、シャプリルの外交交渉は国軍のみならず各政党からも軟弱な妥協として非難されリンガルジャティ協定(→325)の国会での承認手続きは難航した。左派がシャプリル拉致した際にはスカルノ大統領が救出した。

党争に破れシャプリルは首相辞任を余儀なくされたが、現実問題としてインドネシアはオランダとの交渉はシャプリルに依存したため、スカルノはシャプリルを顧問に命じ外交交渉を任せた。当時のスカルノ大統領はシャプリルに頼り切っていた。

以降シャプリルは国連においてオランダの不当を訴え、その活躍によりインドネシアは国際的認知を得てインドネシア独立に好意的な国際世論の形成に貢献した。

政治家としてのシャプリルは議会制民主主義と西欧的個人主義の信奉者であり、インドネシア社会党(→377)の指導者として知識人の支持をえたが、1955年の選挙で大敗し大衆政党となりえなかった。しかし独裁化するスカルノ大統領に抵抗し、両者の確執は相いれない政敵となった。

1960年にPSIは禁止され党首シャプリルは拘留されたが、病のため治癒の名目で国外に脱出した。9月30日事件(→384)で独裁者スカルノ大統領がつまづいた後の1966年4月スイスで亡くなった。ジャカルタに着いたシャプリルの遺骸をハッタ元副大統領が迎え、国家英雄に序せられ名誉を回復した。

スカルノとシャプリルの不和は、オランダによる抑留中にスカルノが大声で歌を歌ったのを同宿のシャプリルが「うるさい！」と怒鳴り付けたのが発端である、とハッタは自叙伝に記している。両者の関係はその程度の単純なことではないだろう。

⇒375.シャプリルの登場

445. ハムンク・ブウォノ9世



ジョグジャカルタのスルタンのハムンク・ブウォノ9世(Hamangku Buwono1912-88)はマタラム王家(→250)の高貴な身分でありながらインドネシアの独立、そして独立後の政治に直接参加し、その果たした役割は大きかった。

オランダのライデン大学に留学し、やがて民族意識に目覚めたハムンク・ブウォノ9世はオランダからの解放をめざす民族主義運動を支持した。1945年のインドネシア独立宣言(→318)に対し、いち早くスルタンの直轄領地も共和国に統合されることを自ら宣言した。その後のオランダとの独立戦争時に共和国はジャカルタを避けてジョグジャカルタ(→

120)を臨時首都とし、新生共和国はスルタンの財政援助に支えられた。

また、スルタン自身が共和国を代表してオランダとの交渉を行った。独立後も共和国の内閣の要職に就いた。9月30日事件以降のスハルト政権において経済特別大臣、副大統領(1974-78)としてインドネシア経済の建て直しにあたった。

スハルト大統領自身が無名の軍人であった当時は、スルタンの名によってスハルト体制の国際的認知がえられたといえる。スハルト体制の確立に伴い中央から去り、ジョグジャに戻った。

インドネシアのボーイスカウト運動や体操や観光に貢献したが、由緒ある王室のスルタンとしてジャワの伝統文化のパトロンであった。王室が育んできた宮廷舞踊(→912)は荒々しい時代の波を生き抜き保護されている。ワヤン(→904)やガムラン(→910)などジャワ文化は王室の何らかの庇護の下にある。

ジャワの4王家(→252)のうちハムンク・ブウォノ9世のみジョグジャカルタ特別州の終身知事として処遇された。共和国の王家に対する妥協というよりは“スルタン”の称号を持った国王のインドネシア人としての生きざまへの敬意と解すべきだろう。

スハルト大統領はジョグジャカルタ近郊の農民の子である。植民地時代のスルタンにとってスハルト一家の身分は月とスッポンの差である。独立戦争時代はひとかどの将校になったスハルト将校とスルタンの両者の接触はあった。

それから20年後、クーデターさながらに大統領になったスハルトに迎えられて副大統領になり、スハルト体制ができあがった。この二人の人間関係はまさにドラマであり、何れ小説などが現れるであろう。

1988年10月のスルタンの突然の死去は国民の哀悼の中に国葬をもって遇された。インドネシアでは時期的に近い日本の昭和天皇の崩御にも例えられている。葬式には300万人が参加した。遺族は4人の妻と19人の子供である。肖像は1万ルピア紙幣でお目にかかる。

1998年5月20日のスハルト打倒のジョグジャのデモの中にはハムンク・ブウォノ9世の息子であるハムンク・ブウォノ10世がいた。混乱する政局の中で大統領候補にハムンク・ブウォノ10世の名前がしばしば取りざたされた。⇒253.ジャワ王朝の終焉

446. アイディット PKI 書記長



日本のインドネシア占領中にアイディット(Dipa Nusantara Aidit 1923-65)という青年が日本海軍の庇護下にあった独立養成塾(→311)に出入りしていた。彼はメダンで農園労働者の子供として生まれ、小学校を終えジャカルタへ移った。

1939年から政治運動に入り、日本占領下の1943年に地下活動を行っていたインドネシア共産党に入党した。日本の敗戦によりインドネシアは独立宣言を発したが、戻ってきた英国軍と戦闘になり、英国軍に捕らわれてオランダに引き渡された。

マデイウンの共産党反乱事件(→326)の際には獄中であり、後に共にインドネシア共産党を背負って立つルクマン(Lukman)と獄中で知りあった。

独立戦争後、ルクマン、ニョト(Nyoto)とともに共産党を再興し、1951年に28歳の若さで書記長になった。その背景は、①外国企業の労働者を組織化し、②中国共産党にならい農村を重視し、③スカルノ大統領へ

の新体制運動への食い込み、などにより民族主義者と妥協路線をとりながら人民を煽動し、動員し、組織化して党勢を拡大してきた。

スカルノ大統領はうるさい政党の掣肘^{せいちゆう}を逃れるため、次第に独裁化に傾いた。共産党だけがスカルノ大統領支持を明確にして大統領の懐に飛び込んだ。アイディットは 1959 年に国民協議会の副議長に就き、1962 年、国務大臣としてルクマン、ニョトとともにスカルノ政権に入閣した。

共産党はナサコム(→380)の一翼としてスカルノ政権を担った。大統領が陸軍牽制のため共産党を最^{ひいき}にしたのに悪乗りした共産党は『マレーシア粉砕』をスカルノ大統領に怒号させ、政権をとめどなく左傾化させた。この間にハッタ副大統領など多くの民族主義運動から独立戦争までの多くの盟友がスカルノ大統領と袂^{たもと}を分かった。

政治的に孤立したスカルノ大統領は一層、共産党に傾斜した。アイディットは独裁者を籠絡^{ろうらく}する術によって個人的に大統領の側近の一人として権勢をふるった。

インドネシア共産党は“インドネシア”を優先し民族主義を前面に打ち出した。折からの中ソ対立ではソ連共産党から、中国共産党⁷に乗り換えた。これにより華僑から資金面で援助を受けるというメリットはあったが、インドネシア人の華僑への悪感情を考えると危険な選択であった。

アイディット書記長は歯切れのよい説明から外国の新聞記者に人気があった。小柄であったが大統領の威光を傘に着て気取って歩いた。人相の特徴はギョロメにあった。対立する側からは催眠術師の眼とも蛇の目ともいわれて嫌われた。

9 月 30 日事件(→384)は共産党系の軍人が準備不足のままに突入したものとされる。クーデターがスハルト將軍によって鎮圧されるや、アイディットは形勢不利と見て建て直しをはかるべく空軍の用意した飛行機で共産党が地盤とした中部ジャワへ逃亡するが、1 ヶ月後ソロ郊外のサンブン(Samben)村に潜んでいるところを捕えられて処刑⁸された。

⇒381.共産党の跋扈

447. アダム・マリク副大統領



メンテン地区(→161)にあるアダム・マリク美術館では趣味のよいブルジョア的コレクションが展示されている。アダム・マリク(Adam Malik 1917-84)元副大統領が死去した後、邸宅を美術館としたものである。しかし彼の前身は北スマトラのバタック人(→607)のジャーナリストとして独立運動に献身した貧乏な民族主義者であった。

1945 年の独立宣言当時は『プムダ(PEMUDA 青年の意味)』という戦闘的青年グループ(→315)の指導者であった。スカルノとハッタをレンガス・デンクロックに拉致した事件(→316)の青年グループの首謀者の一人である。現在の国営アンタラ通信の創設者の一人であり、インドネシアの独立宣言を日本軍の目を盗んで国内外に放送した。

⁷ 1949-50 年頃、中国共産党のインドネシア共産党に対する精神的、物質的援助は大きかった。アイディットも 1949 年 11 月から 50 年にかけて中国に滞在した。インドネシア共産党の重要な部署は華僑党員に握られていた。中国国会では 3 議席がインドネシア華僑に割り当てられていた。⇒増田と「インドネシア現代史」

⁸ 捕らえられたアイディットが裁判もなく軍によって処刑されたことは 9 月 30 日事件の謎を封じ込めた。軍はスカルノ大統領に累が及ばないようにするためという情報をリークしているが、軍自身がアイディットが裁判で証言して困ることは何であったのか。

独立後はジャーナリストとして活躍を続けたが、転身してムルバ党 (Partai Murba) に参加した。ムルバ党は45年世代(→319)の急進的民族主義者によって結成された政党であり、民族主義を前面に出したことにタン・マラカ(→295)の影響が強い。

その後、ムルバ党はスカルノ大統領の独裁化を批判したためムルバ党は解散させられた。スカルノ大統領は共産党に加担したものの、共産党と対立するムルバ残党⁹を閣僚に取り込みにバランスを考慮した。ちなみに同志のハイルル・サレーは大統領の側近になり副首相になったが、9月30日事件(→384)に連座し獄死した。

マリクは駐ソ大使としてモスクワにいた当時から、中国の影響の強いインドネシア共産党に批判的であった。帰国後も閣僚として共産党批判を行ったことが、後にスハル体制で重用される理由である。政治家としては危険な綱渡りであった。

1965年の9月30日事件で共産党が失墜して後は外交官としての経歴を買われ外相(1966年)、副大統領(1978年)に就任しインドネシア外交の再構築¹⁰に手腕を振った。国際的には無名の軍人であるスハルト將軍を支えたのが国際的に名を知られていたハムンク・ブウォノ9世とアダム・マリクである。

それまでのインドネシアの外交はスカルノ大統領の下でバンドゥン会議(→458)やイリアン奪回など華々しいものはあった。第三世界の盟主を指向したことからマレーシア問題を契機に国連を脱退し英米とことを構えた。共産党の影響の下に【北京＝ジャカルタ枢軸外交】に傾斜するに従い、国際的には孤立化し、アメリカなどの西欧諸国からの資金援助も途絶えた。自由主義陣営ではかろうじて賠償がらみの個人的コネクションによって日本との関係が保たれていたにすぎない。

スハルト体制の下でアダム・マリクはインドネシアを国連に復帰させ、マレーシアと和解し、ASEAN(→460)を発足させ、西欧諸国の信頼を回復した。しかし自由主義陣営ではない非同盟という今日も堅持されているインドネシア外交の国策を確立した。アダム・マリクによるインドネシア外交は連続性を維持しながら大転換を行い今日の東南アジアの安定をもたらしてといえる。外交の功績から副大統領(1978-83)に就任した。激動の時代を巧みに泳ぎきった政治家として異色な存在であった。⇒459.外交の軸足

448. ナスティオン將軍



独立戦争を指揮し、独立後もインドネシア国軍の最高実力者であったナスティオン (Abdul Haris Nasution) 將軍(1918-2000)は北スマトラ出身のバタック人(→607)である。植民地軍の士官学校教育を受けた根っからの軍人である。インドネシア独立宣言に応じて立ち上がり、スディルマン將軍の築いた国軍を引き継ぎその基盤を固めた。

スカルノ大統領のナサコム体制(→380)の下でナスティオン將軍の率いる国軍は

⁹ インドネシア共産党は民族主義の強いタンマラカをトロッキストとして憎悪した。ムルバ党はタンマラカの系譜になる。スカルノ大統領は共産党とムルバ党をバランスさせたが、共産党の影響が強くなりアダム・マリクなどの元ムルバ党員は大使として海外に遠ざけられた。

¹⁰ 9月30日事件以降、スバンドリオ外相に代わってインドネシア外交を担当し、マレーシアとの和解、国連復帰を進めた。スカルノ大統領は在任中であり、アダム・マリクの外交を批判した。大統領の意向無視した独断専行は軍部の思惑をもこえるものであった。

牽制勢力として共産党に拮抗したが、大統領が共産党に傾斜するにつれ、大統領との関係はぎくしゃくしたものとなった。

夫人はユーラシアン(→685)でスカルノ大統領の複数妻(→442)反対のデモを組織し、大統領にとって夫婦ともども煙たい存在であった。

9月30日事件(→384)の夜、国軍の幹部が襲われた中でナスティオン将軍だけは夫人のとっさの機知で隣家に逃げ込んだため塀を乗り越えた際の骨折の怪我にとどまった。そのかわり人違いされた士官と娘が犠牲になった。

クーデターはスハルト将軍によってすばやく鎮圧され、その後は〈共産党〉に替り〈国軍〉が国政の主導権を握るに至った。そして国軍の代表もナスティオン将軍に替ってスハルト将軍になった。ナスティオン将軍が軍のトップであるにもかかわらず前面に出られなかったのは、スカルノ大統領に権力の委譲を迫るにはスハルト将軍の方¹¹がよかった。なぜならスカルノ大統領は怨みが積もるナスティオン将軍にたいしては頑^{かたく}なであったが、無名に近かったスハルト将軍に対しては白紙であったからである。

その後の成り行きからスハルト将軍は大統領に選出され、一方、ナスティオン将軍は国民協議会の議長に祭り上げられた。その後、スハルト大統領によって敬遠され、両者の溝は拡大する一方であった。スハルト将軍の出身母体が《ディポヌゴロ師団》であるのに対して、ナスティオン将軍の薫陶を受けたダルソノなどの軍人が《シリワンギ師団》によっていたため、出身師団の対抗意識が取り沙汰された。

スハルト体制の長期化による弊害に対してナスティオン将軍は50人委員会(→396)によってスハルト大統領を批判してきたが、軍の超大物であるだけに捕えて牢へ入れるわけにはいかず、公安当局の取調べや海外旅行の禁止などの拘束を受けていた。

1993年になってスハルト大統領とナスティオン将軍の二人が会見したことが大きくマスコミを賑わせた。病気見舞という口実であるが、その二人が会って話すのは20年ぶりということであった。ナスティオン将軍の気力の衰えを窺わせたところである。

1995年の独立50周年独立記念日の式典でスディルマン将軍(→328)、ナスティオン将軍、スハルト将軍の3人が5つ星(元帥)称号を授与された。先輩を持ち上げるようであるが、授与者はスハルト大統領である。2000年9月、ナスティオン将軍逝去の報が簡潔に報じられた。享年82歳であった。インドネシアのほとんどの人にとってナスティオン将軍は名前も知られない過去の人であった。

449. スハルトの生い立ち

インドネシアに1966年から1988年まで32年間君臨したスハルト(Suharto)大統領は、中部ジャワのジョグジャカルタの近郊のバンドゥル県ゴデアンのクムスク(Kemusuk)村で1921年に生まれた。父は灌漑用水路担当の番人の子である。

¹¹ 9月30日事件でナスティオン将軍は負傷はしたが、業務遂行に支障はなかった。スハルト将軍とともに戦略予備軍本部に昼夜陣として軍の指揮にあたった。ナスティオン将軍は反共の言動が明確であり、ポスト・スカルノの地位はナスティオン将軍が最も近かった。にもかかわらずスハルト将軍が急速に台頭し、スハルトを指導者として期待する声が高まった。スハルトのジャワ人らしい容貌と言動が人気を高めたのは情報操作があったのでないか。この間にはスマトラ島出身のバタック人のナスティオン将軍を大統領にしたくないという将軍連、学生デモのジャワ人の無言のコンセンサスがあったのではないか。その微妙な雰囲気を感じ取ったナスティオン将軍はあえて権力志向を目指さなかったのではないか。以上は私の何の根拠もない仮説である。

自伝では“anakdesa(村の子)”を強調しているようにアバンガン(→631)の出自である。一方ではスルタンの落し子という風説は夫人か取り巻きの示唆で捏造されたものであろう。関白豊臣秀吉の天皇の落し子説と同じシナリオである。

生後2年で両親は離婚したため両方の親族によってあちらこちらへとキャッチボールされながら育った。家族と親族の間の垣根の低いインドネシアでは彼の生い立ちが特に不幸であることにはならない。後にファミリー・ビジネスといわれる財閥となる異母弟や諸々の従兄弟は同じ環境で育った遊び仲間である。

自叙伝で新しいシャツを着る人への羨望を語っており、とにかく貧乏であったことは間違いない。その貧乏の反動が晩年の貪欲な金銭への執着になったのだろう。学資が続かず18歳で中学校の卒業し村の銀行に就職したが解雇されている。使い込み？というのはいさかい推測であって根拠はない。

1940年に日本の侵略に備えるため植民地政府はジャワ人からも兵士の募集を行い、応募したスハルトはオランダ植民地軍(KNIL)に採用された。

1942年3月、日本軍がジャワ島へ進攻してきたが、1週間あまりで降伏したため実際の戦闘に参加する機会もなく故郷に戻った。

今度は日本のペタ(→309)の募集に志願して合格する。小隊長から中団長、大団参謀になる。日本の敗戦でペタは武装解除になり解散した。性格的に地味な百姓より軍隊の方が肌にあったようである。

独立宣言に影響され共和国を守るためペタの幹部を中心に澎湃として起きる機運に国軍が結成され、やがてインドネシア共和国軍に編成された。彼も応じて軍教育の経験がかわれてジョクジャカルタの守備隊司令官になる。

ジョクジャカルタが共和国の首都であったことから政治家に接する機会が多かった。政治家の実際の権謀術策を学んだことは後の处世術に随分と役に立った。

その後、軍人としてイリアン奪回でオランダと対決したトリコラ作戦の司令官であった。ディポヌゴロ師団長と出世したが、汚職疑惑で左遷されたが戦略予備軍司令官に返り咲いた時に9月30日事件(→384)が起き、棚からボタ餅式に大統領になった。

スハルト大統領とスカルノ大統領は何もかも対称的である。スカルノは東ジャワのプリアイ(→629)の子であり、ITB(→108)の輝かしい学歴である。数か国語を駆使するインテリである。一方のスハルトは中部ジャワの名もない農民の子である。ジャワ語とインドネシア語しか話せないたき上げ軍人である。スカルノ大統領は女性問題の賑やかなプレイボーイであったのに対して、スハルト大統領の妻は一人で良き夫であった。

450. 930事件のスハルト将軍

豊臣秀吉は明智光秀の起こした本能寺の変を事前に知っていたのではないか、そうでなければ毛利の大軍を前にあれほど機敏な行動がとれるはずがない。織田信長の一族でもなく、信長配下の拔擢常務級の武将にすぎなかった秀吉の天下取りの実現の僥倖は日本史に秘められた謎である。

スハルトと9月30日事件も不可解である。何ゆえかクーデター側から襲撃の対象にもならなかったスハルト将軍(当時は戦略予備軍司令官)は10月1日の機敏な対処により手際良くクーデターを鎮圧した。スハルトは自叙伝で「軍の大物ではないと共産党から無視されたからである」と語っている。

9月30日事件の真相はインドネシア現代史の謎であるが、少なくともスハルトは事件が起きることを知って

いたと思われる。

このような問題提起はスハルトの大統領在任中はタブーであったが、スハルト辞任後このブラック・ボックスに光りが差し込むようになった。事件の首謀者の一人で無期懲役中のラティフ (Latief) 元中佐は「スハルトに事前に報告した」と証言している。

ラティフ元中佐にとってスハルト將軍はディポヌゴロ師団当時の上官である。ここから先は小説の世界であるが、協力を求める下心の元部下のささやきにスハルトは「Yes」とも「No」とも答えなかった。それをラティフは暗黙の了解と解釈した。

その後、9月30日事件の首謀者は処刑されているにもかかわらずラティフ元中佐だけは処刑を免れて収監されたままであることも不思議である。スハルトがラティフを処刑できなかった理由は何であろうか。

クーデター側の首謀者からスハルト將軍は汚職には熱心であるが、政治イデオロギーでは反共産党を明らかにしていないので共産党陣営に抱き込めると見られていたのであろう。

ディポヌゴロ師団長時代に密輸などやりすぎて左遷されたスハルト將軍はナスティオン將軍(→448)の率いる国軍では傍流の軍人であった。そのスハルト將軍が一気に浮上するきっかけとなったのは9月30日事件であった。事件で襲われて殺害された軍人の多くはスハルトの左遷に同意していたことから、事件の本質はクーデターを借りたスハルト將軍の私怨の仕返しというスハルト首謀説は根強い。

最初に権力を把握した当時は国内でも余り知られていない將軍であった。国際的には無名の人であり、米国CIAの情報ファイルにも記録がなかったといわれる。表舞台に飛び出たスハルト將軍は温和な顔立ちであり国民の期待を一身にあび、国民に“微笑みの將軍”として敬愛されるように勉めた。国外にも軍事政権を仮面でカムフラージュした。

初期のスハルト体制ではアリ・ムルトポ將軍が演出家で黒田官兵衛、高師直のごとき存在であった。ムルトポ將軍の下にスハルト將軍は役者として大統領の演技を続けた。1983年、ムルトポ將軍の亡き後はマクベス夫人としてのティエン夫人(→451)が代わった。スハルトは大統領の座を確固たるものとして帝王になった。⇒ 384. 9月30日事件

451. スハルト大統領夫人



スハルト大統領夫人は1996年4月28日、急病でなくなった。72歳である。スハルトが農民出の一介の軍人である時に結婚した。スラカルタのマンクヌゴロ王家(→131)につながるジャワの下級貴族の後裔である。R.A. Siti Hartinah 本名の冒頭のR.AはRaden Ajengの略で貴族の称号(→637)である。

本名とは別名のIbu Tien(ティエン夫人)で知られる。Tienをもじり“Madame Tien Percent”といわれた。夫人の名“Tien”はオランダ語の10であり、“10%夫人”という意味である。

その心は政府ビジネスには夫人の主宰するヤヤサン(→748)に10%の寄付を強要されるということである。ジャカルタのビジネス界で周知の事実であったが、オーストラリアの新聞でファミリー・ビジネス(→492)の記事に併せて「10%夫人」が紹介され、激怒したインドネシアはオーストラリア政府に陳謝

を要求した。

民営の新聞記事に対して政府に陳謝を要求するのは筋違いであり、オーストラリア政府は無視した。オーストラリアからの観光客の入国を拒否するまでの外交問題にまで発展したが、時間の推移とともに有耶無耶になった。“10%夫人”はインドネシアでは厳しいタブーであるということだけが残った。密かに囁かれたのは10%夫人ならとにかく、晩年はマダム・フィフティ・フィフティにまでスケールアップした。

大統領夫人として国政人事の壟断をしたことからインドネシアのNO.2といわれたことはさておいて、夫人の事業に TMII 公園(→164)、スハルト博物館、スハルト霊廟(→132)がある。最初は自分の父や弟の事業をバックアップしたが、子供の成長に伴い玩具を与えるように事業を与えた。

かつて隣国の大統領が政治失脚して亡命した際に大統領夫人の贅沢の証として靴のコレクションがTV放送され、その日暮らしの貧しい国民は怒りを新たにした。しかし自分の子供のために独占事業をコレクションする大統領夫人と比べると靴のコレクションなどは実に可愛げがあるとわかる。

夫人の死によってスハルト一族の利権の調整者がいなくなった。その結果、一族の利権漁りに歯止めがなくなり、閣僚人事はネポティズムに暴走し、ついにスハルト大統領は政権を投げ出さざるを得なかった。夫人の死後2年後である。夫人が生きていればスハルトの暴走は止められたという説もある。

しかし夫人の正体は亭主を悪の道に追い込んだ“マクベス夫人”である。もっと早く死んでおればインドネシアはもっと良かったであろう。

一族の中では亡命もせず、裁判にもかけられず平安の死を迎えたことは慶賀すべきことであろう。そんなはずはないと願望を込め息子の銃弾で死んだという噂(→586)がある。夫人の醜悪な面の写真を見ると腐った平家蟹を連想する。男女を含めて6人の子供は母親に似ず、美男の父親似であったことは幸いであった。

452. スハルトの子供達

スハルト大統領には3人の息子と3人の娘と計6人の子供がいる。息子の次男のバンバン(→529)と三男のフトモ(→544)はビジネスに進出し事業を営んでいるので記述はそちらに譲る。それでビジネス界がどれだけ迷惑であっても政治に出てこられるよりは国に与える被害は少なかったという意見があることを付記しておく。

長男シギット(Sigit Hardjanti)は博打が好きで外国で大負けし、国営企業が尻拭きをさせられた。その息子のアリ(スハルト大統領の孫)はバリ島のビールや学童の靴納入の利権商売に熱心であった。



トウトウト

長女のシティ・ハルディヤンティ・ルクマナ(略称トウトウト)は事業も営む傍ら政治にも野心がある。大統領夫人のなくなる前から大統領に随行しマスコミにも登場していた。大統領に代わって外国訪問や社会活動など目障りであった。

1996年4月29日の大統領夫人の葬式にも長男をさしおいて遺族代表として挨拶した。その後は母に代わり大統領の第一の側近になった。結婚しているが亭主とはうまくいっていないらしい。もし彼女が亭主とうまくいっておれば事業や政治に励む必要がないから、その方がインドネシアのためにもハッピーであった。

女史は高速道路建設、製紙、貿易などの事業を行う一方でゴルカル(→393)の副総裁の要職を努め、1996

年のスハルト大統領6選の際に副大統領候補といわれていたが、ハビビが副大統領に就任したが、何れもトウトが大統領になると信じられていた。

第7次内閣の閣僚人事はこの女が仕切ったらしい。不倫相手と噂の高いハルトを大臣にするほどの心臓の持ち主である。自らは社会大臣に就任した。5月事件で政府の建物で焼き討ちにあったのは社会省だけである。焼き討ちする方は社会省が憎かったのではなく大臣への腹いせである。社会省も迷惑である。

スハルト退任後はチュンダナ(→161)に逼塞している様子¹²であるが、パパの一件が片付けば(死亡 or 無罪)子供の留学にかこつけて海外へ逃亡するだろう。海外に莫大な資産を隠しているはずであるから悠々自適に暮らせるはずである。



プラボワとティティ

次女ティティの婿のプラボウォ・スビアント (Prabowo Subianto) 1952 生まれである。インドネシア経済の発展のスミトロ・ジョヨハディクスモ博士の息子である。1994 年に大佐から准将に、1995 に准将から少将へと軍隊内でも異例の昇進であった。

始めは軍人の妻であるからビジネスも自粛していたようであるが、亭主との関係がよくないらしく遅れ馳せながらビジネスに手を出しかけたところでパパの退任となった。プラボウォの兄弟がしっかりと利権に食い込んでいる。

スハルト退任劇の際にこの女は亭主がスハルト大統領のために行動しなかったと不作為を詰り、以降、関係が修復不可能になったと伝えられる。

三女は結婚相手が農学者であり、ダーティ・ビジネスに関係ないかと思っただが、ジャカルタ沖埋め立て事業に首を突っ込んでいた。⇒492.ファミリー・ビジネス

453. 老醜の元大統領



ヨリ・ラエヤイ

スハルト大統領辞任後インドネシア国内の騒動が広がった。民族＝宗教対立が経済的破綻の中で激化したものである。これらの事件の直接のきっかけは何者かが扇動したものである。扇動者と目される者はパンチャシラ・ムダの指導者のヨリ・ラエヤイ (Yorry Raweyai) である。彼はイリアンジャヤ出身の元水夫で 51 歳になる。世界的に通用するゴロツキでスハルト大統領お抱えの NO.1 殺し屋である。アルカポネを尊敬しており、自分のゴッド・ファザーはスハルトであると崇めている。

パンチャシラ・ムダは 1959 年に共産党青年部組織に対抗するため軍によって設立されたという歴史がある。スハルト体制の下でゴルカル青年部の別働隊として選挙活動で勇猛を奮った。メガワティ下しの 7 月事件(→397)などに蛮勇を奮いスハルトの私兵として働いた。

辞任後のスハルトやその息子の自宅に出入りし、スハルト支持を高言している。彼の意図は民族間のぎくしゃくした関係に油を播き火をつける。火は燃え広がり大火事になる。現政権に統治能力がないことをあから

¹² 2004 年選挙では PKBP(憂国職能党)ハルトノ党首はスハルト時代への復帰を唱え、スハルト大統領の長女のトウトを大統領候補に担ぎ、選挙の関心を高めたが、惨敗に終わった。得票率:憂国機能党(PKBP)2.11%、パンチャシラ愛国党 0.95%

さまにする。当初は不名誉な辞任のスハルト大統領の評価を高らしめ再出馬をも求める世論を創り出す意図といわれたが、その後は現政権にスハルト訴訟を断念させるための揺さ振りと見られる。

タイム誌(1999/5/24)がスハルト大統領の不正蓄財は150億ドルに達し、密かにスイスから90億ドルを移したという記事には国内外ともに驚いた。スハルトが蓄財していることは誰も知っていたが、具体的な巨額を世界で最も有名な雑誌が記したからである。ちなみにフィリピンのマルコス大統領の蓄財は6億ドル強である。

スハルト自身は外国に隠し口座があるという疑いに対して「もしあれば没収してもよい」と開き直っているが、国民の誰も信じていない。本当の所有者が分らないよほど巧妙に隠しているに違いないと思うだけである。

このような大金をどのようにして蓄財したかという、スハルト大統領在任中にスハルトの財団へ政府と契約する企業からの契約金の一定割合寄金の大統領布告を出す。スハルト一族の反論は財団はスハルトが理事長であるが大統領の私物でない。寄金は法的手続きに基づいているから違法でない。これがスハルト側の言い分であろう。

スハルトの個人財産の不正蓄財の判明分について起訴されたが、健康を理由に出廷を拒否した。地裁は元大統領の健康状態は出廷にたえられないと公訴を棄却した。直前に証券取引所爆破事件があり、スハルト一族が仕掛けたとされている。一族は起訴妨害のためマルク州の暴動を扇動し、テロのスポンサーとなって社会不安を煽っている。

2001年7月、最高裁判事のシャフィウディンは暗殺された。一連の裁判でまともな判断しただけである。一族はテロで国家を恐喝しており、国軍内にもスハルト同調者がいる。ワヒド政権もメガワティ政権もスハルト一派を恐れていたに違いない。

時間の経過とともにスハルト問題は風化し、当局側の期待するスハルト問題の最善の解決は本人が早く死ぬことである。

454. ハビビ大統領



1998年正月から日本経済新聞に連載された自叙伝でスハルト大統領はハビビ(Habibie 1936-)とのそもそもの馴れ初めを紹介している。それによると1950年、当時29歳の若手将校のスハルトはインドネシア独立直後の地方の内乱(→378)の鎮圧のためスラウェシ島に派遣された。ジャワ人の軍隊は地元から歓迎されたわけでない。その中で夫人がジャワ人のある家族だけが親しくし、男手の軍隊の世話をやいた。ちなみに父親はブギス人(ゴロンタロ族?)である。その家族は夫婦に子供がおり、スハルトは利発な男の子を可愛いがった。その男の子が14歳のハビビである。

ハビビの実父が亡くなってからスハルトが“足長おじさん”になった。国民の間にはスハルトの隠し子であるとの噂も流れた。彼は秀才の誉れ高くITB(→108)卒業後、ドイツに留学し、航空工学の博士号を取得した。その筋の専門家としてドイツのメッサー・シュミット社に迎えられ、1974年に同社の副社長になった。

スハルトの^{ひいき}贗品がドイツの民間会社にまでおよぶことはなかろうから、彼自身が逸材であろう。ドイツでの名声が高まり、1974年当時のプルタミナのストー総裁に口説かれてインドネシアに引き戻され、1976年に

IPTN(→533)の総裁に就任した。

1978年に研究技術担当国務大臣となり、さらにバタム開発庁長官、PAL(造船)総裁、BPPT(技術応用評価)庁長官、1989年に戦略産業庁長官など幾多の要職を兼任した。

ハビビ氏がスハルトに寵愛を受けた理由は大きなプロジェクトを打ち上げたことである。バタム島開発、通信衛星はまだまともなプランであったが、原子力発電所、スンダ海峡トンネル、マラッカ海峡の架橋などは政治家ではなく金銭の計算できない科学者の発想であった。「子供がそのまま大きくなったような技術オタク」である。

技術テクノラートの頂点にいる人であるが、ハビビは政治的に重要な存在になった理由は、国軍が強力になりすぎることへの牽制もあり、スハルト大統領の意中には軍への対抗馬としてハビビが位置づけられたのであろう。

1993年の副大統領の人選では結果的にはトリ・ストリスノ国軍総司令官(→394)が下馬評どおりに副大統領に就任した。その際もスハルト大統領の意向(明言しないので臆測をよぶ)はハビビであった。それまでのハビビは政治基盤はなくスハルト大統領のお気に入りというだけであったが、イスラム教関係の団体でイスラム教活動に熱心にやったのは政治的野心があったからであろう。

ハビビはスハルト大統領を“SGS(大天才)”と呼んでゴマをすった。スハルト大統領の健康問題が懸念されたハビビの薦めでドイツの病院で検査し、健康が確認された。これもハビビのおかげと感激した。

公職在任中は新聞、雑誌、テレビでエネルギーギッシュな行動が紹介され、インドネシアの最も多忙な人であった。退任後は特許収入でドイツで悠々自適らしい。

⇒401.ハビビ副大統領、410.ハビビ大統領の業績

455. ワヒド大統領



インドネシア第4代大統領アブドゥルラフマン・ワヒド(Aburrahman Wahid)はNU(→419)の設立者の孫である。アブドゥルラフマンが本人の名でワヒドは祖父の名前である。長い名前は家柄のよい証であるが、日本の新聞は短くて覚えやすいワヒド大統領と呼んでいる。通称の別名のグウス・ドゥル(GusDur)は“小さな王子”という意味である。

ワヒド大統領の家系はワリソンゴ(→712)に連なるジャワの名門である。ワヒド大統領が自分の祖先には中国人の血が入っていると行ったのは、イスラム教をかかげるNUからの大統領に不信感を抱く中国系住民への懐柔の意味もあろうが、15世紀のイスラム教のジャワ布教当時は中国人もイスラム教にかかわっていた。

1940年東ジャワのジョンバンで生まれた。プサントレイン(→733)で学び、卒業後はカイロのイスラム大学、イラクのバクダッド大学でイスラム神学を学んだ。イスラムの学者で、目はほとんど見えず病弱。それでもワヒドはインドネシアで最も尊敬され、愛されている男の1人で「生きた聖人」と仰ぐ国民も多い。

インドネシア語のほか、ジャワ語、英語、アラビア語、ドイツ語を流暢に操る。あまりに静かな口調のため、話が聞き取れないことがあるものの、頭脳は明晰で人を引きつけ、機知に富んだ話し手であった。

1984年にNUの総裁に選出され、1989年、1994年に再選され、次第にイスラム界において影響力を増した。ワヒドを警戒したスハルト大統領はNUの人事に介入しワヒドを外そうと試みて失敗した。ワヒドはスハルト体制に批判的であり、1996年のメガワティ女史のPDI党首解任の7月事件(→397)について公然と政府を批判した。

スハルト体制崩壊後の選挙ではNUの政党である民族覚醒党(→408)を率いて戦った。だが世俗を超越した宗教家で、意表を突く発言の多いワヒドが“政治家”になるというのは、およそ想像を絶する事態だった。結果は第4位で12%台の支持しかなかった。その彼が“瓢箪から駒”のように第4代大統領になった経緯も、国民の支持を失い辞任に追い込まれた経緯も意外であった。

ワヒド大統領の最大の問題は健康であった。糖尿病と腎臓疾患を患い脳卒中の発作を二度も経験し、介添人なしでは歩くこともできなかった。不安は的中し、在任中に午後のインタビューや会議では居眠りをした。

加えてその時々「国会は幼稚園なみ」「閣僚の中に汚職大臣が3人いる」の発言は放言癖として物議をかもし出し、国民に不信感を植え付けた。

「スカルノ大統領は女にクレイジーであった、スハルト大統領は金にクレイジーであった、ハビビ大統領は単にクレイジーであった」とワヒド大統領がインドネシアの歴代の大統領を評した。その後、付け加えられたのは「ワヒド大統領は本物のクレイジーである」とか「ワヒド大統領は周りをクレイジーにする」である。

⇒411.ワヒド大統領の登板

456. メガワティ大統領



初代大統領のスカルノの晩年は不遇であった。輝かしい政治的な業績にもかかわらず彼の政治路線は抑圧され後継者もないまま死亡した。スカルノの名が持つカリスマ性を警戒した当局によってスカルノ大統領の子供達は政治から遠ざけられていた。もし政治にかかわればスハルト体制によって暗殺されたであろう。

スカルノ大統領の遺児¹³は長男グントゥール、長女メガワティ、次女スクマワティ、三女ラチマワティ、末弟グル・スカルノ(Guruh Sukarno 1953-)の計5人兄弟である。デヴィ夫人(→263)の娘もいる。

長女メガワティのフルネーム(Megawati Soekarnoputri)にはプトゥリ・スカルノ(スカルノの娘)が付け加わるように故スカルノ大統領の娘である。母親はファトマワティ(→442)であり、1944年に産まれた兄グントゥーに続き1947年ジョグジャカルタ

¹³ メガワティが大統領になる頃からスカルノの子供間に間隙がでる。2004年総選挙では次女のラフマワティは先駆者党を率い、三女のスクマワティはマルハエン主義国民党を率いて出馬したが、結果は泡沫政党的の枠を超えることができなかった。引き続いての大統領選挙においてはアミン陣営に参画し姉と対決した。スカルノ大統領の信奉者が最も期待を寄せるのは末弟のグル(Guruh Sukarno 1953-)である。彼はアムステルダム大学(1972-74)で考古学を学んだ。ガムラン音楽(→910)にも通じた作曲家であると同時に演出家でもある。『スワラ・マハルディカ』というミュージカル劇団を率いて興行的にも成功したが、娯楽作品であり政治的色彩は薄かった。1992年の選挙でグルが立候補を声明するやたちまちPDIの顔となり“時の人”として注目を集めた。これまでの何かひ弱いところが見受けられた芸術家から一転して赤の鉢巻き赤のジャケット姿の政治家になるや風貌もたくましくなった。グル・スカルノは大統領候補になる用意があると声明し波紋を与えた。

で生まれた。メガワティのメガは“雨雲”の意味である。

メガワティがチキニ小学校在学中の1957年11月30日に父兄参観日にスカルノ大統領が訪れた際に爆破事件が起きた。大統領暗殺未遂のチキニ事件である。大統領の女性問題で別居中の母に代わり、父スカルノ大統領の外遊に同行し、メガワティは幼い時から政治に巻き込まれていた。

しかし1965年の9月30日事件(→384)以降スカルノ一族は、忘れられた日陰の存在であった。メガワティは1968年空軍将校と結婚するも夫は1971年に航空機事故で死んだ。1973年タウフィック¹⁴と結婚した。彼は国民党(PNI)の幹部として活躍したが、ガソリンスタンド経営の実業に転業していた。石油独占の国営公社プルタミナ(→531)での石油営業の利権には何らかの政治的配慮があったであろう。

彼女は父親の失脚後は普通の主婦であったが、時の推移とともにスハルト体制の下でスカルノ大統領の子供というネーム・バリュは逼塞状態の野党には魅力であった。スハルト体制において落ち目の野党のPDI(→393)が起死回生策としてスカルノの子供を担ぎ出した。

1987年の選挙ではメガワティと兄弟が担ぎ出されてスカルノ・ブームを引き起こした。野党の選挙活動は都市の若者に共感を与えた。スカルノの子供は国会議員となり、PDIは26から40に議席を大幅に増加させた。1992年の選挙でPDIはさらに大幅に得票を増やし、1993年にメガワティはPDI党首になった。

選挙民の大半はスハルト体制以降の生まれである。ちなみにインドネシアの選挙権は17歳である。スハルトにはうんざりしている彼らにとってスカルノの名は魅力的であった。その娘がPDIを率いるということで、今度こそはと1997年の選挙が期待された。

ガソリンスタンドの女将さんが前歴であるからメガワティの政治手腕が評価されたわけではない。スハルト以外なら誰でもよいという現状打破の渴望がみなぎっており、その受け皿がメガワティであった。

⇒397.7月27日事件、413.メガワティ政権

457. 期待のユドヨノ大統領



2004年11月APEC会議、ASEAN首脳会議において身長177cm、体重84kg堂々たる体躯の新顔があった。インドネシアの新大統領ユドヨノである。一般に日本人より小柄のインドネシア人の中ではユドヨノの体格は飛びぬけ立派である。

フルネームのスシロ・バンバン・ユドヨノ(Susilo Bambang Yudhoyono)が長すぎるのでSBYの略語が定着している。1949年生まれの東ジャワ出身、退役軍人の一人息子、1973年陸軍士官学校を主席で卒業後、米国ウェズスター大学に留学、国軍のエリート¹⁵であった。蔵書2万冊という読書家であり、インテリとの評判が高

¹⁴ メガワティの夫のタウフィック・キエスマ(Taufik Kiemas)は1942年生まれでスマトラ島パレンバンの出身である。スカルノ大統領当時、国民党系学生運動のリーダーであった。スカルノ失脚後、共産主義者の容疑で1967-70間、投獄された。メガワティと再婚してガソリン・スタンドの利権を得た。PDIのスカルノ担ぎの上げ潮に乗って1987年に夫婦そろって国会議員になったが、PDIから独立してPDIP設立に際してはタウフィックが資金面を担当し、いかがわしい実業家との縁故が始まった。メガワティの復権後は経済動乱の中でスハルト時代のクローニ実業家のタウフィック詣でが賑わった。大統領になってからは利権にからむ海外の派遣団も取り仕切り、悪評が高い。メガワティは夫にマインドコントロールされており閣僚人事にも夫の発言力が強い。政治運営へのタウフィックの介入に反発し、PDIPの良識派の党員の離れが続き、2004年の総選挙のPDIPの敗北の要因となった。

¹⁵ スハルト大統領は国軍の人事に関与し、優秀と見込んだ者を自家薬籠中の物にした。スハルトが大統領辞任を余儀なくされた時の国軍司令官ウィラントの卒業年次1968年組はスハルトが人事を弄んだ最後の世代であった。ウィラントの出世が早かったのは後任にスハルト大統領の娘婿ブラボウォがいたからであるが、さらにその後ユドヨノという国軍の本命がいたからであ

い。

1998年の5月事件当時は国軍の社会政治担当の参謀長であった。スハルト下野後、軍のエースとして政界に転じ1999年にワヒド内閣の鉱業エネルギー大臣に就任、2000年の改造内閣で政治・社会・治安担当調整大臣に就任したが、2001年6月に解任された。2001年8月発足のメガワティ政権では政治・治安担当調整大臣に返り咲いた。ちなみにインドネシアの調整大臣とは並みの大臣より位が高く、政治・治安担当調整大臣は副大統領に次ぐNO.3である。

メガワティ大統領はポストスハルトの本命と期待されたが、彼女のやったことは自己の権力維持のための利権のばら撒きだけであった。汚職は利権とともに全国の組織の末端まで蔓延^{まんえん}した。汚職の蔓延は治安の悪化を誘発し、治安の悪化は海外からの投資を逡巡させた。

国民の期待を裏切ったメガワティ政権に対して世論調査の結果はスハルト時代の方が良かったというSARS症候群¹⁶が高まった。国民の心底に潜在していたSARS意識はクリーンなイメージを伴う国軍のエースのユドヨノに転化された。スハルト時代の国軍に対するアレルギーもユドヨノという個体の強調でうやむやにされた。

メガワティに代わる力のある大統領としてユドヨノへの期待が高まるとメガワティ大統領はユドヨノをインナーサークルが疎外し重要な情報を伝えないなどの意地悪が報道されるとユドヨノの人气がさらに高まった。

ユドヨノは期待にこたえて大統領選挙出馬にあたっては民主党を結成し4月の総選挙では7.45%の得票率を得た。5月の大統領選挙では既成政党からの副大統領としてのパートナーの勧誘を拒み、自らを大統領候補として副大統領候補にユスフ・カラ(JusufKalla)と組んだ。

既成政党の政治基盤はないためTVのメディアをフルに活用した。ユドヨノの選挙運動は失業率の低下と汚職の撲滅を訴えるだけであったが“ユドヨノ旋風”を巻き起こした。ちなみにメガワティ大統領はマスコミを嫌ったし、尊大な振る舞いはマスコミからも嫌われていた。9月の大統領決選投票においてメガワティ側の議会勢力の2/3を占める既成政党の包囲網を破って60%以上の得票率で前大統領を破った。人気投票で大統領になったユドヨノの真価が問われるのはこれからである。⇒415.ユドヨノ政権

る。

¹⁶ SARSは折から流行の鳥インフルエンザであるが、インドネシアではスハルト時代を懐かしむの略語を作り出した。(SARS=sindrom aku rindu Suharto or Sindorome Amat Rindu Suharto スハルト時代を懐かしむ症候群)